



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.176
2018.5.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— E.S. モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

● 第21回 ● 「標本たるの価値」を超えて

「コロボックル風俗考」はパブリック・アーケオロジー発祥の学史として再評価されるだけでなく、示された内容自体も学会誌の論文として議論を経る等、学術的なクレジットを担保している点に注目しなければならない。坪井正五郎のパブリック・アーケオロジーは考古学の発展と社会への貢献の相乗効果を狙う構成に特徴があり、正に日本考古学を確立した神髄を見る思いである。

加曾利B式研究としての注目は、単なる形態分類ではなく、第一に先史考古学としての「ヒト」による製作物を「標本たるの価値」へと昇華するプロセスであり、第二は「名状すべからず」美術から「標本たるの価値」へと高める中で「新たな可能性を見出すべく形態学を高度化する実践」にある。

「コロボックル風俗考」により西ヶ原貝塚報告を中断し、椎塚貝塚等の成果も加味しつつあるべき「類似の形態連携論」の導出に拘るならば、両者をつなぐ課題として読み解くべきは、本連載第17回で要点にのみ触れた西ヶ原貝塚報告の置き土産であり、具体的には「横霊芝形把手の起源に付いては考えがござります」との余韻を残して(未完)のまま中断する。」としたように、本草学系形態学として「横霊芝形」突起への格別なる執着である(『日本先史土器図譜』では「横霊芝形」突起を含め、深鉢の系統的発達がかかるように突起と口縁部形態、及び文様帯が排列されている)。

そこで本連載第1回に戻るならば、第2図で西ヶ原貝塚の「把手の形状」を紹介、その中に「横霊芝形」の分類を認めるが、恐らくは加曾利B1式を知らなければ具体的に第21図のようなイメージは湧かないであろう。突起は加曾利B1式研究の要でもあり、要点から

詳細へと理解を深めるためにも西ヶ原貝塚では如何なる形態学的視点により「横霊芝形」突起が範疇化されたかを追認し、坪井正五郎による「標本たるの価値」の意義を確認するならば、次に見えるのは「起源」分析となる。

早速、詳細の説明に移るならば、「横霊芝形とは霊芝を横倒しにした様なもの、図中左の方は笠の部に当たる」と全体のイメージかつ目立つ属性に注目し、更に下位分類では「横霊芝形」の「形状」と「笠の部」、及び突起と土器自体との関係を明らかにすべく土器の「模様」との組合せを重視する。「横霊芝形」の「形状」分類とは「外より見たる形」の相違で、やがて「把手の形状」分類名称自体が変転するので後述することとし、先ずは下位分類である「笠の部」及び「横霊芝形」の「形状」との相関を強く示す土器の「模様」についての分析(除く分量)を詳細に追認する。

「笠の部」の分類に当たり、「霊芝の笠に当たる部の頂上」を「平坦面」と呼び、その「平坦面」を「所在」と「形状」から構成する。「所在」とは「平坦面」が左右のどちらを向いているかという属性で、西ヶ原貝塚の3点、及び大学蔵の他例12点を抽出し、「横霊芝形」突起は全て「左」を向いていることが示される。連載第17回で紹介したように「平坦面」の「形状」は、「つ巻」と「蛇の目」(更に大森貝塚例の「蛇目の初めと終りの重なり方が左前に成って居るもの」は「左前蛇の目」と追加、そして「中凹」が定義され、「つ巻」と「蛇の目」による遺蹟連鎖は既に触れた通りである。

立体的な突起の形態とは異なり、土台となる土器の「模様」は外面と内面の両面で平面的に観られ、西ヶ原貝塚では異なる「形状」の突起3例中の2例に、「内箍模様」(「土器の内

面に在って縁に並行したる数条の線から成り立つ箍のような模様」と「帯形模様」(「土器の縁に並行して外面に数条の線を引き回らし、其限界の間に席紋を付けたる模様」)が共通し、他の1例は「無紋」であることから除き、白眉はこの共通する2例がどのような土器であるかを導出する手順である。

この手順に登場するのが、「横霊芝把手を有する完全なる土器一個、及び殆完全なる土器一個」で、「此完全なる土器(椎塚発見)は深い鉢形で、底は平らで、座りが好く出来て居ります。殆完全なる土器(陸平発見)も是と同様、外面の模様も共に帯形でござります。」と解説されたように、第26図に参考として『日本先史土器図譜』掲載の椎塚貝塚出土加曾利B1式深鉢を示すが、完形土器の突起の形態と土器の「模様」の複合する構成に共通性を担保する「標本たるの価値」を認め、西ヶ原貝塚の口縁部破片2例についても両者の共通性から同様の土器であることを考察するのである。これが西ヶ原貝塚に限定した破片分類から、完形土器である椎塚貝塚の成果も踏まえてのより信憑性を高める形態学へと進展した姿である。

しかし、坪井正五郎はそれだけには止まらない。新たな可能性を見出すべく、「横霊芝形」から分類名称を変え、比較による詳細を穿ち、「起源」分析へと形態学の高度化を続ける姿勢は大いに啓発される。



▲第26図 『日本先史土器図譜』の加曾利B1式(椎塚貝塚)

※巻頭連載は隔月です。次回は 大村裕さんです。

目次

■加曾利B式土器 「標本たるの価値」を超えて(第21回) 鈴木正博 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第169回) 坂本真一 …3
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第14回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2	■考古学者の書棚 『土とは何だろうか?』 池田征弘 …4

考古学の履歴書

「ことのはじまりー「..それでは 何だ」(第14回) ————— 間壁 忠彦・間壁 霞子

4. 石棺の石材(5)

吉備地方の家形石棺の始まりを考える時、一番に問題となるのは、瀬戸内市(旧邑久郡)長船町西須恵にある長90mの前方後円墳築山古墳の家形石棺である。この地は前回、岡山県内の石棺としては特異な棺を持った三基の古墳が、集中して存在していた吉井川東部であり、そこでは中心的な地域の一角に当る。

この刳抜形の家形石棺の石材同定には、私たちは一番苦労した。明らかに凝灰岩ではあるが、それまで比較的スムーズに露岩と共に同定できた竜山石でもなければ、四国の鷲の山や火山の石でもない。それかといって、私たちが最初に知って驚愕した九州阿蘇山系黒灰色の凝灰岩ではない。ピンク系の石材である。すでに近畿地方の多くの家形石棺を見ており、そこには竜山石以外には、地元の石材といえる二上山系の白色凝灰岩使用が基本であったが、中には九州阿蘇山系の石棺も存在することは確かめていた。また築山古墳と同系の石材利用石棺のあることも個々検討して知った。

すでに古くから、古墳時代石棺研究は盛んであり、注目された古墳の石棺については、形態の形式分類、その分布状況の研究は進んでいた。こうした先学の研究もあり、岡山県の築山古墳石棺と極めて類似した形態の、奈良市野神古墳の石棺は、築山古墳石棺と全く同様な石材であったことなどは、確かめていた。私たちが最初にこの種の石棺石材を明らかにしたのは、『倉敷考古館研究集報 第12号』(1976・8)だったが、この時既に河内・近江・大和盆地内の東北部などで同種の石材製石棺9例を示している。

私たちはこの石材を、二上山ピンク石と呼んだ。二上山には多くの種類の凝灰岩があることから、二上山のかなり各地点を探したが、確実に露岩から同種石材は採集できなかった。ただ二上山の山中で採集されていた類似の石材から推定したものだった。というのも従来は、良好な石材のあるところであれば、その地の周辺には同種の石材による石棺があるのが原則であった。このピンク石の家形石棺は九州の地には、いまもまだ発見されて無いようだ。しかし河内の長持山古墳などでは、九州阿蘇山系の黒灰色凝灰岩とこのピンク石の石材による、2種の石棺が発見されていることなどから、九州の石棺を遡源としたうえで、二上山の石材による、新しいタイプの家形石棺製作となった石棺であろうと考えたのである。そうして私たちは石棺形態の変動や移動を問題にするだけでなく「ここに大きな政治的変動をみる」としてこの石棺を扱ったのである。

この頃の私たちが三年ばかりかけてたどりついた、遠距離石棺移送の個々の事実は、当時は賛成者もかなりはいたが、あまりにも従来の石棺研究の常識を破るものだったのか、研究者の中には距離を置いている人も多かった。ただ興味を示す人は増えていた。

その後15年ばかりを経て、熊本県宇土市の高木恭二氏によって、二上山ピンク石は、宇土市の馬門石と訂正された。当時はまるで始めて九州の石棺が古墳時代に近畿地方まで運ばれていたことが分かったかのようなマスコミの取り上げで、少々驚いた。九州の石棺を参考にしながら誕生したと考えていたピンク石の石棺は、二上山で露岩が発見されてなかっただけに、私たちにっては、直ぐに納得されるものだった。

先にあげた忠彦著の『石棺から古墳時代を考える』1994年では、石材の訂正によることでの考え方に、大きな変化はなかったと記している。2005年には馬門石で作られた現代の石棺を、近畿に運ぶイベントが行われ、それに伴って『大王の棺を運ぶ実験航海一研究編一』(2007・10)が出版されている。私たちとは無関係なことだったが、古墳時代にも、重量のある石棺をはるばる移動した歴史のあることへの、啓蒙的なイベントになったと思う。

ともかく『記紀』の世界では5世紀末から6世紀前半にかけてとされる時期に、皇位継承とか対朝鮮半島各地との対外交渉や戦闘状況の動乱とも言える時代が記されている。遺跡・遺物の面でも、確かにこの時期には大きな変動を示す実態が、各方面から明らかにされている。石棺の動向もその一つといえる。だがこの動きを、全て近畿勢力を中心として捉えるか、地方勢力のなお独自の動きがあるかを見るかでは、歴史に対する理解も違ってくるだろう。

岡山県の実態に戻ろう。私たちの石棺石材追及のきっかけは、第一回に書いたように、1970年より続いた、倉敷市の王墓山と呼ばれた丘陵一帯の住宅団地開発で、その地名の由来になったに違いない古墳から、明治末年に多くの遺物とともに出土していた石棺であった。この山塊には、吉備では弥生時代末の王墓とも言える、楯築神社遺跡や女男岩遺跡も存在する。

この石棺は組合家形石棺で、岡山県西部に産する堆積岩の貝殻石灰岩浪形石製。この時の調査報告は『倉敷考古館研究集報 10号』(1974)だが、ここに参考として東京国立博物館蔵の遺物と共に、王墓山の石棺図も記載した。岡山県内の浪形石製石棺5基全ては家形石棺だが、王墓山の石棺だけが組合形で、他はすべて刳抜形石棺だった。しかもその中の2基は岡山県では最大級の横穴石室に収められている。こうした中で、王墓山古墳から言えば、間に10余kmばかり海を隔てた児島で、まるで岡山平野も王墓山あたりも、見渡せる位置に築かれた、岡山市(旧児島郡)北浦の金製垂飾付耳飾り等出土した八幡大塚古墳は、王墓山古墳より、やや後発的と見られるが、その石棺は竜山石製作の組合式石棺であった。浪形石石棺使用期に重なるものである。『記紀』の中の、この時期の記述と、こうした吉備地方二種類の石棺の関係は、次回になってしまった。

間壁忠彦 略歴

1932~2017年 岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる
1951年 岡山県立操山高等学校卒業
1955年 岡山大学法文学部法学科卒業
1954~1973年 (財)倉敷考古館学芸員
1973~2006年 同上館長
1968~1998年 広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講
1982~2005年 就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講
2006~2015年 (財)倉敷考古館学術顧問

間壁霞子 略歴

1932年 岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる
1951年 岡山県立操山高等学校卒業
1955年 岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業
1955年 岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)
1956~2015年 (財)倉敷考古館学芸員
1979~1986年 中国短期大学非常勤講師(歴史学)
1985~2004年 神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授
1995年 明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回は井川史子先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 169

皆見大塚古墳 ～福岡県京都郡みやこ町

坂本 真一

私が入居して7年目の夏、初めて念願の古墳調査を行うことができ、その調査で巡り会えた遺跡が皆見大塚古墳である。卒業論文では古墳墳丘における祭祀をテーマにするなど、古墳については興味があり、いつか自身で調査をしたいとずっと思っていた。職員になって初めて古墳調査にたずさわることができた思い出のある古墳だ。

平成20年10月から東九州自動車道みやこ・豊津IC建設に伴った発掘調査が本格的に始まった。自宅からこの発掘現場のある福岡県北東部の京築地域まで片道100km=2時間の道のりを、約2年間ほぼ毎日通い続けた日々が思い出される。

この古墳は発掘調査前からその存在が知られていたわけではなく、みやこ町の遺跡分布地図にも記載はなかった。平成21年5月20日、私が行った確認調査で溝を検出し、この地区を本調査対象地とした時から、私とこの古墳との縁は始まっていたと思う。

この地区はまず東側から調査を行い、中世頃の掘立柱建物跡、土坑、溝などを検出した。この時点ではあまり時間もかからず調査を終了させ、他の地区で今後検出されるだろう古代道路の調査にとりかかる予定であった。西側を掘り下げた所、人頭大の石が密集し、半円形状に巡る周溝を検出して古墳だと分かった時は、調査経験も無い自分が発見してしまった、と喜びより不安で一杯であった。

そこは調査前宅地部分であったため古墳の墳丘はカットされ、石室上部が露出した状態であった。石室内部を掘削していくと羨道から前室に関しては天井石もなく、比較的残りはよかったが、玄室は玄門部分のみ天井石まで残存するが、左右側壁・奥壁は腰石のみで、残存状況の悪い複室構造の横穴式石室であった。

石室石材が抜かれていたこともあり、出土遺物にあまり期待はできなかった。しかし玄室から耳環、ガラス玉、管玉などが出土し、前室から単鳳環頭大刀1振、鉄鏃多数、八花形座金具と宝珠形の飾り鉾が付く雲珠・有脚半球形や、板状十字形の



▲玄門左袖石背面

辻金具などの馬具一式が出土した。特に単鳳環頭大刀が出土した瞬間は興奮した。

そうして石室内の掘り下げが終了し、写真撮影を行うために石材表面の土砂を洗い落としていた。玄門左袖石背面を洗っている時に、表面が赤く色づけされていることがわかった。あまりにもはっきりと赤く×印状にかかっているため、誰かがイタズラでしたのではないかと

と冗談を言われるほど鮮明な赤色であった。石室内にはその他、側壁に大小の三角文、奥壁に同心円文などで文様が構成されていた。

装飾が発見された後、調査は一変した。まず古墳をどう一時保存するのかが調査担当者であった私の役目となった。皆



▲装飾付須恵器(九州歴史資料館所蔵)

見大塚古墳は玄室の天井石や墳丘がないため、直に石材が雨露に触れてしまう。そのため、テント1張りとブルーシートで玄室の天井を覆って、直に石材が濡れることを防ぐ措置を執った。

装飾古墳は福岡県にとって非常に重要であり保護の対象とし、原則として現地保存をすることが前提であった。私が直接保存協議に関わったのは県文化財保護課と西日本高速道路株式会社九州支社福岡工事事務所との定例会議の場であったが、事業者側の関係者に対して、古墳の重要性についての理解促進に努めた。その後の協議は私が直接関わることはなかったが、文化財保護課の先輩方と県高速道路対策室・みやこ町教育委員会生涯学習課企画・同町調整課を交えて進められた。協議はすんなりと進んだわけではなかったが、半年後には装飾古墳の保護に理解を得ることができ、事業者側から工法変更による保護案が示された。平成23年5月には西日本高速道路株式会社九州支社長、福岡県知事、みやこ町長の3者による県指定史跡の範囲・時期、構造変更に関する確約書が締結され、古墳が現地で保存されることになった。ただどうしても工法変更に伴って破壊されてしまう墳丘および周溝については、平成23年に2次調査も行った。さらに、この古墳との最後の別れとなる古墳の防護作業を8月～9月の暑い日差しのなか行った。発掘作業員さんと一緒に真砂土入りの土嚢約4000袋で埋め戻しをして、一連の作業を終了した。

古墳は、現在もみやこ豊津IC近くの橋梁下に現地保存されている。皆見大塚古墳が現地保存できたのは、事業者側の関係者および保存協議に尽力頂いたこと、県・みやこ町の関係者、また私の我儘に付き合っていたいただいた発掘作業員の皆様に協力によるものだと思う。このような古墳の調査は今後も経験できないかもしれないと思い、今回ここで紹介させていただいた次第である。

最後に皆見大塚古墳の宣伝をしたい。今年の『発掘された日本列島展2018』では、皆見大塚古墳出土の単鳳環頭大刀・馬具・装飾付須恵器などの遺物が全国の各所を巡回する予定である。特に装飾付須恵器は復元品であるが、壺の胴部突帯に付属する小壺間には猪や雌雄の鹿が配置された珍しい遺物である。機会があれば、ここまで読んでいただいた方々に、ぜひ足を運んでいただきたい。そして、それらの出土遺物を発掘した時の感動を、同じく感じていただきたいと思う。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは小嶋 篤さんです。

考古学者の書棚

「土とは何だろうか?」

久馬一剛 / 学術選書001 京都大学出版会 (2005)

池田 征弘

「土とは何だろうか?」というタイトルに心ひかれてこの本を手にした。これまで発掘調査員として長らく土と向かい合ってきた。発掘調査現場では、主に土の色の違いを見つけ、遺構の形を見定めて、掘りだし、また、遺構や遺跡を覆う土についても観察し、土層図に土色名や土の質について記録していくことをしてきた。学生の頃は「黄褐色」とか「暗灰白色」のように土色名を、「粘質土」とか「砂質土」とかいうように感覚的に土の質について記録した。就職してからは標準土色帳を見ながら土色名を付け、土の粒子の大きさについて Wentworth の基準に基づいて記録するようになった。報告書作成時には記録された土層図などを見ながら、遺跡の形成過程を経験的な知識に基づき思量するのであるが、長らく土と向きあう生活を過ごしてきたが、必ずしも土そのものについて十分な知識を持ち合わせてはこなかった。

「はじめに」では、常套的ではあるが「土」という字の成り立ちから説き起す。漢代の『説文解字』では2本の横棒は土層を、縦棒は地中から地上に延びる植物を示し、生物を生み出すことを意味している(通説では土の盛り上がりの形象とされ、白川説ではまるめた土を台状に置く形とされている)。この生命をはぐくむという観点で「土」を見た時に「土壌」と呼んでいる。これまで、土については地盤としての土や土器などの素材としての土として意識してきたが、「土」の字義が示す「生命をはぐくむ」という観点をもったことはあまりなかった。

大規模造成農地の失敗の理由を探るところから、生命をはぐくまない土と生命をはぐくむ土壌がどう違うのか、明らかにする。造成農地の土は白っぽくバラケやすい感じで、普通の畑の土は黒っぽく、軟らかく豊かな感じのものである。この違いは畑の土は有機物を含み、それを餌にする土壌生物の排泄・分解作用により、土の粒子が凝集し、簡単に分離しない塊「団粒」になることによるということである。土壌は、土本体の無機物と有機物からなる固体部分(固相)と固体間の隙間(孔隙)からなり、隙間部分を水(液層)と空気(気層)で分け合っている。一般的に固相と孔隙の容積は半々であり、予想以上に孔隙の占める割合が大きく感じる。この孔隙は、「団粒」という塊をなすことにより安定し、この団粒構造の孔隙の働きにより土の透水・保水・通気の機能が保たれ、植物の生育が促進されるということである。

植物の栄養となるカリウムなどの無機養分はほとんどが土壌から得られる。そのもととは岩石の風化によりもたらされたものである。土壌のもととなる岩石の種類によって土質や無機養分の種類と量が異なり、玄武岩と花崗岩では、玄武岩のほうが土質が粘土質で、無機養分が豊富な肥沃な土壌となる。リン酸などの自然状態では密度が薄い重要な植物の栄養となる有機養分は、植生の遷移に伴って表土の土壌が形成されるなかで、徐々に蓄積される。また、植物に供給されたものが、落葉・腐朽などによりその場で循環される。このように豊富な栄養源が形成されるのである。

このように土壌の中には豊富な養分が存在するが、それは土壌内の粘土の中にため込まれているのである。粘土は、ケイ素化合物の結晶とアルミニウム化合物の結晶が組み合わさったもので、その結晶構造にカリウムなどの無機養分を取り込んでい

るのである。ただ、この構造は永続的に安定したものではなく、化合物の化学変化によって、粘土は風化し、最終的には石英と酸化物質に分解し、養分を保持する機能も失ってしまう。化学変化の速度は気温が高いほど進むため、熱帯地域に酸化した赤い土が多く、土地が痩せていることが多いのである。多かれ少なかれ、時間とともに土壌は老化し、火山の噴火・河川の氾濫などにより新たな土壌が供給されれば、土地は若返るのである。

日本の土は酸性とされている。墳墓の調査で骨が残らないのは土質が酸性だからと理解している。特徴的な畑の土壌として黒ボク土を取り上げている。兵庫県でも北部でしばしばみられる土壌であるが、発掘調査現場では遺構の検出の難しい土であり、作業服が真っ黒になる、手の指紋がなくなるなど難儀な土である。この黒ボク土は、火山灰の風化により生成されたアルミニウムと植物腐食の複合体であるとされている(近年の地質学では人為的な野焼きなどの行為が成因であるという説が有力視されている)。有機物を多く含むが、腐食が強いため強酸性で、農地としては適さないらしい。しかしながら、リン酸などの化学肥料の大量利用が可能となったため、水はけもよく、保水性にすぐれていることから、現在では畑作栽培の盛んな地となっていることは実感するところである。基本的に酸性の土壌は、養分供給力が低く、リン酸欠乏が問題となり、継続的な畑作は困難なことから、伝統的に畑作農業は相対的に地位が低かったのである。

水田については、水とともに流れてくる養分と湛水による土壌の還元化などによる化学変化の作用を利用している。畑と比べて、湛水のために地形を平坦化しているため、土壌侵食の恐れや、湛水・乾水を繰り返すことから連作障害の危険性が少ないなど、継続的に安定した生産が行える。大陸アジアの稲作産地に比べて日本は、小規模な平野と急こう配の河川という不利な条件であるが、畑作が困難な土壌が理由で、安定的な生産が行える水田稲作が普及し、不利な条件を克服するために、技術が発達したと考えている。

このように、人間は土壌が作用する安定した仕組みの恩恵を受けてきたのであるが、人口の増加を主な原因とする過剰な開発活動が、熱帯林破壊・地球温暖化・酸性雨・塩害・土壌侵食・砂漠化など土壌に大きな影響を及ぼしている。土壌の役割は、①生物の生育を支える生産、②元素の生物地球化学的循環をつかさどる分解、③地球上の水循環の調節、④大気組成の恒常性の維持と、地球環境の安定にとって重要な役割を果たしており、その保全は極めて大切なことがわかる。

化学式で説明される部分は理解が及ばない部分が多く、上記の要約が適切なのかもおぼつかないが、最も興味を覚えたのは土壌に関する基本的なしくみがわかりやすく解説されている部分であった。著者が「あとがき」に記すとおり、一般の人に読んでもらえるような「土壌についてのわかりやすい本」だと思う。

アルカ通信 No.176

発行日 2018年5月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801
長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp
URL : http://www.aruka.co.jp